

# CITIZEN OF THE YEAR 2012

社会に感動を与える人々を応援します



吉村 隆樹さんによせて

障害を持つ方にとって、現代の便利な情報社会は、逆に「伝えにくいストレス」「伝えられないストレス」が大きくなっていると思う。その中で、おもいやりをこめて作り上げたシステムによって、障害をもつ方の「伝えられる喜び」を生み出した。これからもたくさんの響き合いが増えるのではないかな。素晴らしいアイデアとおもいやりに乾杯。

武田 双雲



## 使う方の喜びを自らの力に 障害者支援ソフトを無償公開

吉村 隆樹さん / よしむら たかき 1965(昭和40)年生まれ。長崎県佐世保市在住



シチズンホールディングス株式会社  
代表取締役社長  
戸倉 敏夫

# CITIZEN OF THE YEAR

社会に感動を与え明るい未来を築く活動を  
シチズンはこれからもずっと応援してまいります

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、社会に感動を与えた無名のよき市民という基準で選考を行い、その活動を称え表彰しています。シチズン創立60周年に際し、社名の「CITIZEN(市民)」にふさわしい記念事業をとの思いから1990年に創設され、今年で23回目を迎えました。毎年、受賞者の方々の心温まる活動に触れるたび、社会とどう向き合い、自らどう生きていくのかを問いかける思いがします。今年の実績者の方々は、他者への思いやりにあふれ、それぞれの強い信念に基づいて継続して活動されています。こうした行為の一つひとつが社会に感動を与え、人々の笑顔や幸せをつくり、明るい未来を築いていくのではないのでしょうか。シチズングループは、これからも「市民に愛され市民に貢献する」という企業理念のもと、市民の皆さまのよき活動を応援してまいります。

### CONTENTS



3 使う方の喜びを自らの力に  
障害者支援ソフトを無償公開  
● 吉村 隆樹さん



7 自然体で成し遂げた、2度の  
エベレスト登頂女性世界最高齢記録  
● 渡辺 玉枝さん



11 紛争から立ち直ろうとするルワンダで  
義肢提供や就労支援に取り組む  
● ルダシングワ 真美さん

15 対談 シチズン・オブ・ザ・イヤー  
選考委員長 2012年度受賞者  
山根 基世さん & ルダシングワ 真美さん

18 歴代受賞者一覧

### シチズン・オブ・ザ・イヤー

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰する制度です。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙のなかから、賞にふさわしいと思われる記事を選び、主要新聞社の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。これまで、日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

### 2012年度 選考委員会

- 委員長  
山根 基世 (LLP「ことばの社」代表)
  - 委員  
香山 リカ (精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授)  
斎藤 浩 (産経新聞社 社会部長)  
斎藤 准 (日本経済新聞社 社会部長)  
藤田 和之 (読売新聞社 社会部長)  
益子 直美 (スポーツコメンテーター)  
丸山 雅也 (毎日新聞社 社会部長)  
山中 季広 (朝日新聞社 社会部長)
- 敬称略・五十音順 ※役職は、2013年1月現在

### 各受賞者へ贈る 書

書道家  
武田双雲



昭和50年熊本生まれ。3歳から母である書家・武田双雲(そうよう)に書を叩き込まれる。東京理科大学工学部卒、NTTに約3年勤めた後、2001年1月より書道家として湘南で創作活動をはじめ。代表作品に「人生」「種」「波」などがある。





初めて使った  
病院のパソコン

## 人生の 大きな転機になった パソコンとの出会い

長崎県立諫早養護学校(現諫早特別支援学校)を卒業した吉村隆樹さんは、1984年、佛教大学通信教育部の社会学部社会学福祉科に入学しました。大学1年生の9月に足の手術をした病院で、その後の人生に転機をもたらすパソコンと出会ったのです。

医局で、以前から強い興味を持っていたパソコンに初めて触れたときのうれしさは想像を超えていました。その日から、医師によるパソコン指導がスタート。しかし、問題も発生しました。キーボードを打とうとすると

他のキーにも指があたりうまく入力できないのです。そこで吉村さんは、両手でスティックを握りキーを打つ入力方法を考え出しました。この入力スタイルは今も続いています。

約1年間の入院中、吉村さんは徐々にプログラミングをマスターし、退院が近づくころには診療報酬の計算ソフトの制作を依頼されるほどになっていました。

吉村さんは脳性小児まひで、手足や言語に障害があるため、様々な作業に介助を必要としますが、プログラミングはパソコンを使い一人で作り上げることができ、作り上げたソフトに健常者との違いはありません。吉村さんを指導してきた先生は、将来のことも考えてか、当時はまだ非常に高価だった

(左)お母さんと一緒に参加した、大学のスクーリングで友人たちと  
(右)リハビリに励む大学生の吉村さん



# 思いを伝えたいすべての人たちの 「こころのかけはし」に

吉村 隆樹さん  
Takaki Yoshimura



「ハーティラダーは、人を幸せにするソフトですね」

吉村隆樹さんにとって、自ら開発したソフトウェアへの感謝の言葉は何ものにも代えがたい喜び。「体に障害があっても自分の思いを伝えたい人のために」と、仲間の協力を得て作り上げた「ハーティラダー (HeartyLadder)」は、今日もそんな人たちの「こころのかけはし」になっています。

パソコンを買ってあげるよう両親に助言しました。  
支えてもらっていた自分が  
多くの人の役に立つ

大学の勉強を続けながら、独学でパソコンのプログラミングを身に付けていった吉村さんは、大学3年生のときパソコン通信と出会いました。

パソコン通信には、目や耳の不自由な方も参加していましたが、やりとりをする上でハンディキャップはまったく関係ありません。また、自分が作ったソフトを多くの人に使ってもらえ、その反響が返ってきます。「人の力を借りることの多かった自分が、誰かの役に立ちお礼のメールが届く」。この感動は吉村さんの大きな励みになりました。

パソコン通信により知り合いの輪が広がり、実際に会って親交を深め、ソフトの制作依頼を受けることもありました。そしてついに、大きな夢が叶えられる日が来たのです。

パソコン通信を通じて知り合った男性から、一度会社に来てほしい

かと誘われたのです。会社は臨床検査を主な業務とし、その方は検査に関わるプログラムの開発部にいました。

会社を訪ね、自信のある自作ソフトを見せながら、吉村さんは2時間ほど話をしました。帰りのクルマの中で、ここで働いたらとつぶやく吉村さんに、「神様がたまえを必要と思ってくれば、必ず仕事が見つかるぞ」とお母さんは励ましたそうです。

数日後、その願いが現実となったのです。1988年12月1日、吉村さんは正社員となり、社会に参加し人の役に立ちたいという願いが叶ったのです。しかも、在宅勤務という願ってもない条件でした。

使ってくれる人のために  
「こころのかけはし」を育てる

お父さんの定年後は、両親の故郷である奈良に帰るはずでしたが、この地で素晴らしい友人知人に恵まれ、就職も決まった吉村さんのことを家族が優先してくれ、佐世保に永住することになりました。

そんなある日、「体が動かさない



渡辺玉枝さんによせて

年齢を重ね、体力的に衰えることは避けられない。その中で、精神を磨き、謙虚に生活をして、様々な逆境に立ち向かっていく姿。そんな渡辺さんが挑む姿にどれだけの人が勇気づけられたら。現代の若者が置き忘れた「挑」の心を、ふたたび呼び覚ましてくれたと思う。挑むことの大切さを教えて頂いたことに感謝。

武田 双雲

# 挑

双雲  
武田

## 自然体で成し遂げた、2度の エベレスト登頂女性世界最高齢記録

渡辺 玉枝さん / わたなべ たまえ 1938(昭和13)年生まれ。山梨県南都留郡富士河口湖町在住



「ハーティラダー」を作った仲間と共に、今も改良を続ける吉村さん



「ハーティラダー」の表示画面

## 「思いを伝えてほしい」 その情熱に 仲間もみな協力

お年寄りが、コミュニケーションをとる良い方法はないでしょうか」と吉村さんは、地元の保健師から相談を受けました。

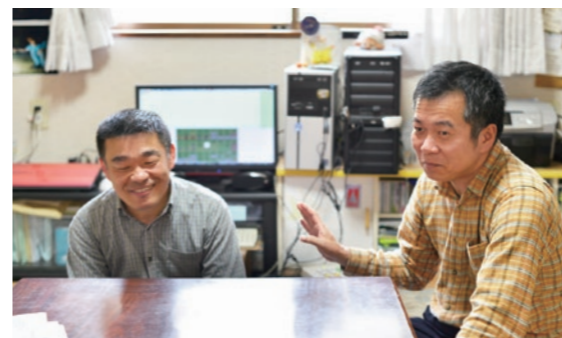
吉村さんは、一緒に相談を受けたメンバーとともに、かつて密かに考えていた50音表を半分ずつ絞り込む方式で、文字を入力するソフトウェアの開発に取りかかりました。最初に仕上がったものをメンバーに試してもらおうと、思った以上

に高い評価でした。

これならいけると、印刷やメール機能を加え、漢字入力や辞書を7人がかりで半年かけて作りました。見やすい画面にするため、デザインは仲間の女性が全面協力してくれ、より明るく温かみのあるものになり、「文字を入力するもの」から「思いを伝えるもの」と仕上がっていききました。これまで、どのソフトよりも難しかったのですが、人に思いが伝わらないさみしさを知っている吉村さんは、使ってくれる人のことを思い浮かべ、どうすればうまく使えて喜んでもらえるか常に考えたと言います。

多くの仲間と一緒に完成させたソフトに吉村さんは「こころのかげはし」という意味を込めて、「ハーティラダー(Heartly Ladder)」と名付けました。「このソフトをフリーウェア(無料)で公開したい」と相談した時、全員その場で気持ちよく賛成してくれました。その時のことを今でもよく覚えているそうです。

そして、2000年8月10日、無料で公開した「ハーティラダー」は、数日のうちに500人も



(左上)20年来の仲間だという吉浦正利さん(右)は、「使う人の喜びが彼自身の喜びなんです」と話す  
(左下)吉村さんご一家。(左から)母親のアヤ子さん、奥さまの泉さん、父親の義之さん、長男の優輝くん



スイミングスクールに通う優輝くんを見送る吉村さん

の人がダウンロード。「こんなソフトを待っていた」などの反響が寄せられました。

2011年夏には、難病の進行で声を失う方のため、「マイボイス」という機能を加えました。これは自分自身の声を登録しておけば、入力した文章がその声で読み上げられるというものです。東京都立神経病院の作業療法士・本間武蔵さんの依頼を受け、5年がかりで完成させました。市販のソフトは百万円程度と高額で、声の登録に半日かかるのに比べ、無償でも声の登録は15分程度で済みます。「マイボイス」を使って自分の声を残せるということは、声を失った多くの患者さんの生きる支えになっています。

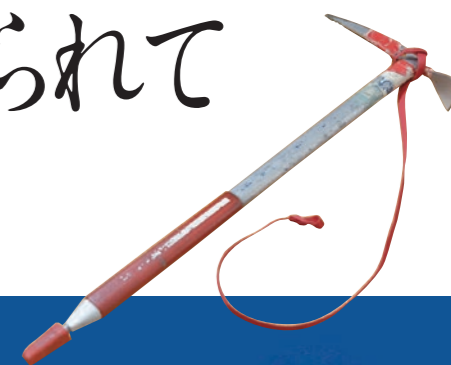
思ったことをやり遂げる吉村さんのこうした熱意について、お母さんのアヤさんは、「小さいときから頑張り屋で、『無理だよ』という言葉が嫌いで、何でも自分でできると信じている子でした」と話します。

障害があってもパソコンを通じて自分の思いを伝え、心が通じ合っしてほしいと、今日も吉村さんは、仲間と一緒に新しいアイデアに挑み続けています。



# 頑張った以上の感動を見せてくれる 大自然と山に魅せられて

渡辺 玉枝さん  
Tamae Watanabe



「先生、わたし、また山に登れますか」

2005年の夏、畑仕事の途中にめまいを起こした渡辺玉枝さんは、水の干上がった川底に転げ落ち腰椎に大怪我を負いました。医師の「登れます」という言葉を信じ、7時間半に及ぶ手術と丸2年にわたる辛いリハビリを支えたのは、再び山の感動に出会いたいという思いでした。



【写真提供：村口德行氏】

無心の挑戦で  
再び立った  
地球の一番高い場所

2012年5月12日、チベット側のルートからエベレスト登頂を目指すため6300mのアドバンス・ベース・キャンプに入った渡辺さんは、5月15日にはノースコルと呼ばれる7300m地点に到達。18日に8300mのアタックキャンプに入り、あとは頂上を目指すだけとなりました。下山の時間を計算して出発は夜の9時。真つ暗ななか8848mの頂上に向けてアタックを開始しました。パートナーは、これまで8000m級の山を3度一緒に登っている日本有数の山岳カメラマン、村口德行さんです。

登り始めた渡辺さんをアシスタントが襲います。突然足が上がりなくなったのです。「これはいけない」。原因は、酸素ボンベの酸素がなくなっていたのです。脳に酸素が届かなければ体はすぐに反応します。気付いたシエルパ(ヒマラヤ登山の案内人)がボンベを取り換えてくれ、なんとか大事には至りませんでした。

ヘッドランプの明かりだけを頼り、中学のころには20kg以上ものマキを毎日背負って運んでいたそうです。

中学卒業を前に、父親が病にたおれ進学を断念。しかし、1年間、家の仕事をしてみて、定時制の高校なら通えそうだと母親を説得しました。夕方までめいばい畑仕事をし、そのあと片道6kmの道のりを毎日自転車を通った4年間。「結局、小学校から高校まで皆勤賞でした」。渡辺さんは定時制高校の卒業式で総代を務め、新聞に取り上げられたことから授業料免除で都留短期大学(現都留文科大学)に入学しました。

短大卒業後、民間の企業勤務を経て神奈川県公務員試験に合格。神奈川県職員としての新たな人生がスタートしたのです。

1965年、県庁の山岳会が募った山歩きに渡辺さんは初めて参加し、そこで山の魅力に出会います。「北アルプスの蝶ヶ岳からみた槍ヶ岳と穂高岳が、本当に素晴らしい山でした」。そのときリーダーの山登りを見て、しっかり教えてもらいたいと県庁の山岳会に入会。国内の登山歴を積み重ね、やがて海外へと挑戦を広げました。

りに登り続ける視線の先には、何度か志なげで力尽きた登山家たちの遺体が現れました。世界最高峰への挑戦は、それほど過酷なのです。

アタック開始から10時間後の翌19日午前7時、ひたすら登り続けてきた渡辺さんの目についに頂上が近づいてきました。

「10年前はネパールからのルートだったので、今度の頂上の様子はどうなんだろうと思っていました。そして、ああ、同じだと。まずそれを超えたい」と、自然は努力以上の

確認しました。

73歳の渡辺さんが、10年前に自身で樹立した、女性のエベレスト登頂世界最高齢記録を更新した瞬間です。目の前には、地球の一番高い所からしか見ることのできない景色が広がっていました。

「記録は考えたことがありません。山登りを続けてきた最大の理由は、やはり感動の大きさです。素晴らしい景色もそうですが、たとえ天候が悪いときでも、成し遂げたあとには、自然は努力以上の



小さいころから重い荷を背負って両親を助けたことが、山登りに役立っていると渡辺さんは言います(後列左端が渡辺さん)

## 20キロものマキを 背負って運んでいた 中学時代

渡辺さんが生まれ育ったのは、富士山を望む、現在の山梨県南都留郡富士河口湖町。家が農家で、子供のころから畑仕事を手伝い、夏は羊やヤギの餌になる草刈り、冬には山に入ってマキ拾いをし

再びエベレスト山頂に立った渡辺さん(左)。共に登頂した村口さんについて、「私がきつときにきちんと対処してくれる信頼感が大きい」と話します  
【写真提供：村口德行氏】

仕事との両立を貫いて  
続けてきた山への挑戦





ルダシグワ 真美さんによせて

言語も文化も全く違う、そして、距離も遠い国ルワンダ共和国に対して、日本人女性がこんなにも長きにわたって、義肢装具を提供し続けている事実に感動した。どれだけのルワンダの方に希望や喜びを与えたのだろう。想像しただけで涙が出そうになる。日本の技術をこういう形で貢献に転換する真美さんの行動力と智慧を誇りに思う。

武田 双雲



# 紛争から立ち直ろうとするルワンダで 義肢提供や就労支援に取り組む

ルダシグワ 真美さん / ルダシグワ まみ 1963(昭和38)年生まれ。ルワンダ共和国キガリ市在住



## 自然への思いや 山への情熱で 大手術と リハビリを克服

77年にはアラスカにある北米大陸最高峰マッキンリーに挑み、非常に過酷な南壁のルートから女性として初登頂。資金と休暇をためては、モンブラン、マッターホルン、キリマンジャロ、ヒマラヤなど世界有数の山に登頂し、しかもこれまで登頂率100%を続けています。「天候などは自分ではどうにもなりませんから、山運が強いのでしょうかね」。渡辺さんはそう言って笑います。

こうした海外遠征では仕事との両立に気を配りました。長期休暇を取るようになるため、職場の理解を得られるよう普段から一生懸命仕事に取り組み、休みの間の仕事の段取りを万全に組んで、他の職員に迷惑がかからないようにしたのです。



北米最高峰「マッキンリー」。不可能と思えた氷雪の絶壁を上るルートを女性で初制覇

### 富士山の自然を 守りながら その素晴らしさを伝える

59歳で渡辺さんは公務員を退職。2002年、63歳のとき最初のエベレスト登頂に挑み、見事女性の世界最高齢記録を樹立しました。このときも渡辺さんらし

く、カメラマンの村口さんから誘われた時、そう簡単に登れる山じゃないだろうけれど、エベレスト街道のトレッキングが楽しめるというので、参加を決めたのだそうです。それが、登れるところまで行ってみようと高度に体を慣らしながら7300mまで登り、このまま行けるかもしれないとサウスコルと呼ばれる7980m地点にテントを設営。そこから一気にアタックし快挙を成し遂げたのです。「頂上には誰もいなくて40分くらい村口さんと独占し、写真を撮ったり、酸素マスクを外したりして楽しみました」。

2003年に、43年ぶりに故郷の富士河口湖町に戻り家を建てた渡辺さんは、かつてのように畑仕事をしながら、また地道な生活を始めました。畑では大根やニンジンも育て、自分で食べきれない分は近所に配ったり実家に持って行くそうです。こうして普段の生活を大切にしている渡辺さんにとって、2度のエベレスト登頂の世界記録もそうした普段の生活の延長線上にあると言えます。現在も、富士河口湖町のネイチャーガイドや富士登山ガイドをしながら野菜を育て



海外遠征は多額の費用がかかるため、普段から節約を心がけ、登山も最低限の費用で、装備の一部は仲間から借りることも

そんな渡辺さんに、今年うれしいニュースが飛び込んできました。富士山の世界文化遺産登録が確定になったのです。「特に、溶岩の上でできた青木ヶ原の樹海の素晴らしさを、一人でも多くの方に知ってもらいたいですね」。

毎日富士山が見えるところに住んで贅沢です。笑顔を見せながら、この自然をしっかりと守っていかなければと、渡辺さんは決意を新たにしています。



富士登山ガイドを務める渡辺さんは、世界文化遺産として環境保全がさらに大切になると話します



# 心の傷を癒やし、自立の支えとなるために

ルダシングワ 真美 さん

Mami Rudasingwa

「義足を履いて歩けるようになったら、最初に何をしたい?」

ルダシングワ真美さんは義足を作る前、必ず患者さんに聞きます。その日、患者さんは答えました。

「歩くときはいつも両手で杖を握るので、妻の手を握って歩いたことがありません。

一度でいいから手をつないで歩いてみたいです」。

真美さんが活動を続けたいと思う瞬間です。



アフリカでの  
出合いを機に  
義肢装具士の道へ

26歳の時、真美さんは語学留学先のケニアで、後に夫となるルワンダ人のガテラ・ルダシングワ・エマニエルさんと出会いました。祖国の紛争を逃れてケニアに来ていた彼は、誤った植民地政策で民族間が傷つけ合っている現状を話し、平和が戻れば国のために役立ちたいと熱く語りました。これが、現在の活動の出発点でした。

1991年にガテラさんが来日。足に障害があるガテラさんが着けていた装具が壊れ、二人が訪ねた義肢製作所で日本の高い技術

就労支援にも  
取り組みながら  
異文化と格闘する日々

真美さんたちの義肢提供活動は口伝えに広がりました。一方で、提供した義足が街で売られていたり、義足をはずしてまた物乞いに戻ってしまう人がいる現実にも直面しました。

そんなときガテラさんは、彼らに「うちに働きに来ないか」とよく声をかけました。ガテラさんは、常に困っている人に手を差し伸べ、正しい方向に導こうとする人でした。ストリートチルドレンにも働きに来よう声をかけました。子どもたちが日当をためて、うれしそうに白いスニーカーを買うのを見ながら、真美さん

はガテラさんの人間的な大きさを感じました。子どもたちの中には、今も真美さんたちの所で働いている若者がいます。

義足を着けてもそれだけで生活が楽になるわけではありません。「彼らが自分たちで稼いで家族を支えるようにならないければ、本当の自立にはならない」。そう考えた真美さんとガテラさんは、

5年の修業で  
ルワンダで生かす  
技術を習得



大虐殺により人口の約1割にあたる80万人が障害者に



患者さんの受付風景



活動を始めて最初の患者さん



活動開始時の仮の製作所

術を知ります。「これは、ルワンダで必ず役に立つ」。そう直感した真美さんは製作所の親方に弟子入りを志願。ルワンダで役立てられるよう、「本当に、何も無いところから部品を作っていくような技術を教えてください」と頼み込み、厳しい修業が始まりました。

1994年、ルワンダで犠牲者100万といわれる大虐殺が勃発。終結後、祖国に戻ったガテラさんは、政府との粘り強い交渉で、義肢製作を行うためのNGO認証と活動するための土地を獲得しました。5年の修業を終えてルワンダ入りした真美さんも加わり、1997年から活動がスタートしたのです。

敷地内に職業訓練校を設け、技術習得の支援も始めました。真美さんたちは、義肢の提供はあくまで自立の一步に過ぎず、一番大事なのは考え方自体を変えてもらうことだと強調します。敷地内にはレストランやゲストハウスも作りました。就労の機会を提供するということもありませんが、活動資金を得ることも絶



シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長

2012 年度受賞者

山根 基世さん & ルダシングワ 真美さん

# 一人でも多くの人々の自立と幸せを願い ルワンダから広がる支援活動



MOTOYO YAMANE

山根 基世さん

NHKアナウンサーとして「新日曜美術館」「映像の世紀」「ラジオ深夜便」など数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンサー室長に就任。NHK退職後「ことばの杜」を設立

MAMI RUDASINGWA

ルダシングワ 真美さん

シチズン・オブ・ザ・イヤー受賞者のルダシングワ真美さんを迎え、選考委員長の山根基世さんが、真美さんと夫のガテラさんの義肢提供活動への想いや、これまでの生き方などを伺いました。

常に前向きに取り組むお二人の姿にあらためて感動を頂きました。

**国づくりの歴史の中で  
障害者支援に取り組む**

山根 ご主人のガテラさんは、スワヒリ語を学ぶために留学したアフリカのケニアで出会われたのです。

真美 何度か会ううちに、まず人間的に惹かれていきました。彼はルワンダの情勢や、何故そういう状態になっているのかを話し、だから自分は祖国のために役立ちたい、いつも熱く語っていました。

山根 今回の受賞活動である義肢の提供は、ガテラさんの祖国再建に対する想いから始まったといえますね。

真美 子供のころ育った障害者施設の神父さんから、「自分への感謝の気持ちは、他の人に何かしてあげることで示さない」といつも言われた少年の日の想いも、現在に続いているのだと思います。

山根 そんな二人が、ルワンダで15年頑張ってきた。

真美 94年の虐殺後、ルワンダ



## ルワンダの国づくりに 関わっている実感と共に

今回の受賞で、自分たちの活動をいろいろな人知ってもらえたことが一番うれしいと、ガテラさんは話します

対必要で、資金がなくなると活動が続けられなくなるといいために、取り組みです。寄付のお金ではなかなかできない新たな挑戦も、自分たちで得た収入ならできると真美さんは話します。

金銭や時間の感覚、仕事に対する姿勢が日本と異なる人たちの雇用し、毎月の給料を工面するのは、真美さんにとって大変な苦



義足は自立への第一歩

労でもありません。「常に問題がある毎日で、それを克服するのとて強くなり、前に進んできたのだと思います。私は日本人なので、つい日本人の感覚を押し付け

けてしまいましたが、違いを認めることが大切です」と話します。

たくさんの出会いと患者さんの笑顔に支えられ

1994年の大虐殺後、ルワンダは政府と国民が力を合わせて新たな国づくりを進めています。真美さんたちはほぼ時を同じくして活動を始め、これまで6000人を超える人たちに義肢や車いすなどを提供してきました。

吹きさらしの部屋から始まったルワンダでの生活。「規模は違いますが、国が直面している問題は自分たちの問題であり、政府が困っている時は私たちも困っていました。大げさかもしれませんが、それは自分たちがルワンダの歴史に関わっているという実感です」と、真美さんは振り返ります。

そうした中で、日々の義足づくりへの想いは今もまったく変わらなるといいます。「一番大事にしているのは、その人が喜ぶものを作ることです。患者さんの肌の色に可能な限り近づけ、ズボンの裾から見えた時その人の足に見える



義肢製作所の建設はレンガを1つずつ作る地道な作業から始まりました

会報の「ONE LOVE通信」



支援者の中心である後列左から竹内さん、志津野さん。中列左から石川さん、真美さん、鈴木さん夫妻。前列、中村さん

ように作りたい。支援というのは、ただものをあげればよいというものではありません。喜んでもらえるかどうかです」。

患者が義足を着けたときの笑顔。そして、それを履いて意気揚々と家路につく後ろ姿を見送るとき、真美さんは「ああ、また明日からも頑張ろう」という想いが強くなるといいます。

真美さんたちの活動は、最初の支援者である今は亡きお父様をはじめ、真美さんの真つすぐな生き方を応援する多くの支援者によって支えられてきました。真美さんは、「山と山は出会わないけれど、人と人は出会う」というルワンダのことわざが大好きだと話し、そんな出会いに支えられ、これまで活動を続けることができたと話します。

義肢提供は隣国のブルンジにも広がり始めています。真美さんは、将来はルワンダの人たちが自分たちで資金を集め、「ワンラブブランド」と名付けたこの施設を運営してもらいたいと願っています。そのためにも人を育てたい。それが今の目標です。





はすべてゼロから始めなければなりません。でも、政府も国民も国の再建に努力している時、私たちも障害者のための義肢提供という形で関わったことは非常に良かったと思います。もちろん、とても大変なことなのですが、辛いことをみんなで分け合い、そうした中で努力が形になっていくのを見る喜びもありました。

山根 真美さんがルワンダに入られた時は、どんな状況だったのですか。

真美 街はやっと機能し始めていましたが、私たちが住んだ

ルの最上階は壁もなく吹きさらしで、電気も水もない。電気の代わりはロウソクで、水はポリタンクに入れて最上階まで運んでいました。大変でしたが、なんだか楽しかったですね。

山根 何もないところから、少しずつ変わっていく喜びでしうか。

真美 建物が建て直され、畑が耕され、国が再建を進めるなかで、「自分たちも一緒にやっているんだぞ」という快感がありました。その歴史の一部になれていることがうれしかったです。

ですね。ちゃんと会話もしなかつた私のために、こんなに応援してくれるのだと。私たちが会報を出すと、それを自転車に積んで街中に配ってくれるんです。どこに行っても「お父さんから話を聞いていますよ」と言われて、あれは本当にうれしかったです。

山根 お父さまのあと、大勢の支援者ができましたね。

真美 自分のやりたいことをやっているという思いがあったのですが、多くの人に支援を受けて私は幸せだなと思いました。始めたばかりで、本当にこの活動を続けていけるのか私自身にも分からない時期から、頑張ってくださいと言って寄付をいただき、今も支えてもらっています。

後に続くスタッフを育てる活動をもっと

世界に広げたい

山根 結婚は活動を始められてからだそうですね。

真美 籍を入れたのは2001年で、父に「これから二人で真

剣にこの活動をやっていくんです」というのを伝える意味もありました。

山根 お父さまに対して自分の生き方をきちんと見せなければいけない。その真美さんの覚悟を見せたわけですね。その後、活動をする中で真美さん自身が変わったことはありませんか。

真美 人を使って仕事をすることで気持ちが強くなりましたが、強気だけでは相手を不快にさせるだけなので、謙虚でありたいと心掛けるようになりました。相手のことを考えないと、どんな仕事もできないと思います。

山根 本当の強さというのは謙虚さから生まれるのかもしれないですね。そういうこと、人間として学ぶべきことなのではないですか。

真美 そういふ点でも、アフリカと関わることでできて本当に良かったと思います。

山根 基世さん & ルダシングワ 真美さん



祖国の再建を想う  
夫の情熱が  
いつしか自分の  
目標になりました

山根 ガテラさんの情熱が、真美さん自身の想いにもなっている気がします。

が、経験もないし断ろうとしたのです。その時、ガテラが来て「作るぞ!」と言って、何日か掛けて作って履かせてみたら、そんなに慣れちゃったんです。そんなふうには、彼の言う通りにまじはってみると、うまくいくことは多いですね。これからは一緒に生きていく中で、いろいろ教えてほしいと思いますし、私から彼に何か教えることができればと思っています。

父親と多くの  
支援者の応援が  
義肢提供を続ける力に

山根 真美さんが子どものころ、両親の育て方ってどんな感じだったのですか。

真美 母は私が中学校のときに亡くなりました。そのあとは、掃除や洗濯など家庭のことは父がやるようになり、中学、高校とお弁当も作ってくれました。それなのに、女の子って父親の存在をうつつと思う時期があつて、あまり会話をしませんでした。それがアフリカに行つてから、「お父さん、ちゃん



互いに尊敬し合いながら活動をしている真美さんとガテラさん

二人の力を合わせ  
支援が必要な  
人たちのために  
さらによい活動を

山根 今、どうやって自分は生きていったらいいのか、目標が見えない人がたくさんいるでしょう。ですから、真美さんのように生きていく上での目的や、やりたいものが見えているというのは、とても幸福なことだと思います。これからは、活動をどう進めていきたいと思われていますか。

真美 義肢の提供は隣国のブルンジでも始めましたが、この活動をもっと広く知らせたいので、私たちがいなくても運営できるようなスタッフを育成していきたいです。

山根 真美さんとガテラさんを見てみると、愛の力はすごいと思います。はるか日本とルワンダで生まれた二人が巡りあつて。

真美 母国語が違うのは、つながりを強めることになると思いますが、話してもうまく伝わらないものを、なんとか伝えようと思つてますから。

山根 お互いのことを分かり合おうとすることが、きっと夫婦の関係を深めているんですね。これからも力を合わせて良い活動をしてください。

(敬称略)



今を生きるヒントに  
一人でも多くのルワンダの人が幸福に暮らせるように支援する活動は、本当に素晴らしいことだと思います。真美さん自身もそのことによつて気持ちが満たされるのではないのでしょうか。真美さんたちの生き方は、今を生きる私たちにとって非常に大きなヒントになるような気がします。

山根基世



# CITIZEN OF THE YEAR 1990-2012 受賞者の皆さん

1990年に創設され、これまで23回にわたり、市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。1990~2012年度の受賞者の方々の素晴らしい活動をご紹介します。

2012年度	吉村 隆樹さん	障害者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供
	渡辺 玉枝さん	自然体の生き方で、2度のエレスト女性最高齢登頂記録を達成
	ルダシングワ 真美さん	紛争から立ち直ろうとするルワンダで義肢提供や就労支援に献身

2011年度	税所 篤快さん	バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む
	竹内 龍幸さん	盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける
	笹原 留似子さん	東日本大震災の被災地で復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2010年度	吉田 守松さん	半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける
	吉岡 諒人さん	夏休みの観察・実験を通じ、「アジゴクは排泄しない」という通説を覆す
	樋口 強さん	がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年

2009年度	吉島 美樹子さん	ガン治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている
	多以良 泉己さん	リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている
	茂 幸雄さん	福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う

2008年度	伊藤 和也さん(故人)	戦禍のアフガニスタンで緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる
	川崎個人タクシー協同組合	知的障がい施設の子どもたちと行く「タクシードライブ遠足」を30年間継続
	出水市立 荘中学校	ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀

2007年度	西谷 勲さん	中学の夜間学級に50年間仕送り続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る
	車内清掃を続ける高校生有志	JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い
	谷垣 雄三さん	西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる

2006年度	川越 恒豊さん	刑務所内で放送される人気番組のDJを27年間で300回以上続ける
	桑山 利子さん	スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす
	有城 覚さん	交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園

2005年度	堀田 健一さん	障がい者一人ひとりのニーズに合わせた自転車、手作りで26年間作り続ける
	吉野 健治郎・勝 親子	親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける
	日本スピンドル製造株式会社 社員一同	JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施

2004年度	新宮山彦 ぐるーぷ	20年にわたって大峯奥駈道(熊野古道)の南半分約45キロの整備を続ける
	兵庫県市町村職員年金者連盟 豊岡支部 有志	水没していく観光バスの上で励まし合いながら全員が無事生還
	永井 利夫・サヨコ ご夫妻	子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた

2003年度	高松 由美子さん	長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援
	遠藤 マルシア アケミさん	お弁当の配達で縁で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校
	曾我 健太さん	ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘

2002年度	谷村 基さん	励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける
	武井 弥生さん	東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続
	アフガニスタン義肢装具支援の会	アフガニスタンの人々のために義肢を制作・進呈

2001年度	伊藤 明彦さん	全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録
	大島 誠人さん	自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見
	菅谷 昭さん	チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事

2000年度	近藤 原理・美佐子ご夫妻	障がい者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた
	ジュンコ アソシエーション	ベトナムの子どもたちの教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続
	福祉工房あいち	障がい者一人ひとりの障がい度に合わせて、補助器具を考案し、製作

1999年度	セイヤー・ミドリさん 与那嶺 政江さん	在日米軍の父と地元女性の間にも生まれた子どものために、学校を開校
	トーマス・カンサさん	修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2000台
	録音グループ「声」の皆さん	視覚障がい者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年

1998年度	岸本 康弘さん	ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む
	金子 聡美さん 安田 志津さん	ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断
	「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん	電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る

1997年度	葛木 みどりさん	南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現
	高澤 圭介・ナミ子ご夫妻	私財を投じてお年寄りや障がい者が気軽に立ち寄れる家を完成
	愛知県立東山工業高等学校 車いす部	高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1996年度	小山 道夫さん	ベトナムの子どもたちのため職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設
	福岡 明夫さん	自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録
	古川 ヨシさん	障がい者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師

1995年度	川田 龍平さん	命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身
	木村 三男さん	濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出
	神戸商船大学「白鷗寮」自治会	阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出勤

1994年度	星野 勇・シズエ ご夫妻	足の不自由な方のために1000足を越える靴を無償で修理・改良
	山下 秀治さん	知的障がい者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築
	森本 春子さん	山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける

1993年度	宇佐美 松恵さん	1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る
	佐藤 昭夫さん	パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年
	8/6 竜ヶ水駅 災害救助活動グループ	土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助

1992年度	清水 ルイズさん	日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている
	千川 文次さん	絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元
	「雄冬新聞」 歴代編集長	地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー

1991年度	チョン・キューキョンさん	長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ
	馬場 国敏さん	湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地でも活動
	十円会	月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献

1990年度	加藤 幸男さん	バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助
	鈴木 陽子さん	過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動
	林 鎌友さん	使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付





## シチズンホールディングス株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12  
TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280

<http://www.citizen.co.jp/coy/index.html>

CITIZENはシチズンホールディングス株式会社の登録商標です。